司馬遼太郎

菜の花の沖〈二〉

菜の花の沖〈二〉

司馬遼太郎

文藝春秋

遼

菜の花の沖 二

昭和五十七年七月二十五日　第一刷

定価　千二百円

著者　司馬遼太郎

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　東京　二六五―一二一一

印刷　大日本印刷
製本　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

©Ryotaro Shiba, 1982　Printed in Japan

目次

北風の湯 7
松右衛門 30
オランダ船 52
熊野鰹 73
北風荘右衛門 91
大灘 114
薬師丸 151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松前の夢　194
北　前　251
和田岬　295
あとがき　359

装幀　粟屋　充
題字　中田　功

菜の花の沖　二

北風の湯

兵庫の津には、北風というふしぎな豪家がある。

嘉兵衛がおふさに、

「きょうは、昼を食べたあと、北風の湯にゆく」

といえば、おふさの脳裏にもその入浴風景がほぼ絵になってうかぶ。船乗りの町である西出町で、北風という家の恩恵をうけなかった者は一人もない。

たとえばにわか雨が降ると、北風家では店先に傘を山のように積みあげる。

近在を往来しているひとびとはみな走ってその店の前にゆき、傘を借りて用を足しに行ったり、帰宅したりするのだが、借りるのは無断でいい。返納についても、北風家ではやかましくいわない。

それだけに借りた側は負担が軽くなり、つい返すのを怠ってしまう。

雨があがると、西出町の長屋などで「北風」という文字入りの傘がわが物のように干されていたりする。北風家の手代が通りがかったりすると、

「阿呆かいな」

とつぶやいて取りあげてゆくのだが、むろん未返納の傘が多かった。それでも北風家はそのつど補充し、にわか雨ごとに傘の山を積みあげるのである。

「荷主、船頭、水主働きなど、身分を問わず船に乗る者を大切にせよ」

というのが、兵庫の代表的な廻船問屋である北風家の家訓になっていた。

――兵庫を興したのは、北風はんや。

と、土地でいう。

諸国の廻船はふつう大坂の河口港に入る。それらのうち幾分かでも兵庫の湊に入らせるべく北風家が船乗りを大いにもてなした。

一面、船宿を兼ねている。

「兵庫の北風に入りさえすれば、寝起きから飲み食いまですべて無料じゃ」

と、諸国の湊でいわれていたが、まったくそのとおりであった。北風家は兵庫における他の廻船問屋にもそれをすすめ、この湊の入船の数をふやした。

入船が多ければ、その湊が富むことはいうまでもない。

直乗（持船）の荷主や船頭が、自分の船の荷の何割かを兵庫でおろしてしまうからである。

――兵庫の北風か、北風の兵庫か。

といわれたほどであるだけに、遠国からの入船のほとんどは北風家に荷を売った。北風家はただちに店の前で市を立てるのである。

「北風の市」

というのは、入船のたびに遠近からあつまってくる仲買人でにぎわった。

入船をたえず北風家にひきつけるためには、船乗りの気うけをよくしておかねばならない。め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しなどはいつ行っても、無料であった。入船の船乗りだけでなく、西出町の家にもどっている船乗りでも、

「どりゃ、これから北風に振舞われて来ようかい」

と、七宮という宮の前の北風屋敷に出かけてゆく。勝手口から入ると、富家の娘のようにいい着物をきた女中たちが、名前も船名もきかずに給仕してくれるのである。

北風家の湯というのは、二十人ほどが一時に入れるほどに豪勢なものであった。

嘉兵衛は淡路から兵庫に出てきて早々というものは、船乗りの世界で有名な北風の湯へ行く勇気など、とてもなかった。

（船に乗ったことがあるといっても、瓦船ふぜいに乗っていたというのでは大きな顔もできぬ）

と、当時おもった。北風の湯へゆく連中のほとんどは北前船（日本海航路）の船乗りで、瓦船とは豹とねずみほどのちがいがある。

「船乗りは北風の湯へゆけ。湯の中にどれほどの智恵が浮いているかわからぬぞ」

といわれていた。老練の船乗りたちが話す体験談や見聞談は、後進にとってそのまま貴重な智恵になるし、同業にとってはときに重要な情報になった。

ただ嘉兵衛の場合、小規模とはいえ北風家と同業の廻船問屋堺屋につとめていながら、他店の振舞にあずかるというのはどうにも気がひけて、兵庫にきてこのかた行ったことがない。

が、嘉兵衛が江戸一番乗りの樽船宝喜丸に乗って兵庫にもどってからは、かれを見る同業の船乗りの目がちがってきた。

「堺屋の嘉兵衛という男を知っているか」

というのが、しばしば湯での話題になった。
とくに宝喜丸の沖船頭（雇われ船頭）重右衛門が、嘉兵衛のことをしきりにほめた。
「二十三や四で、あれほどの男はまず居ない」
と、重右衛門は話題が出るごとにいった。
「知工（事務長）ができて表（航海士）ができるのじゃ」
重右衛門がいうのは、船の経理事務や荷さばきという商務ができて、しかも航海術に達している、ということであった。
「帰りは表をやらせたところ、難なく遠州灘を突っきったわい」
などともいった。
こういう評判が北風の湯で立ってから、嘉兵衛は町で北風家の手代に出会った。
「嘉兵衛さん、うちの湯になぜおいでなさらんのじゃ」
手代が、やかましくいった。
「それとも、嫁御と毎日、共行水をなされておるのかや」
さらに、
「貴方さん、北風の湯に入りに来なさらんと、ゆくゆくえらい船乗りにはなれませんぞ」
ともいった。
この日、嘉兵衛は店にもどってサトニラさん（堺屋喜兵衛）にこの旨をいうと、
「北風の手代までが、お前に声をかけてくれたか」
と、よろこんでくれた。サトニラさんにいわせると、北風家というのは信じられぬほどの古代からこの浜で続いている家だという。

戦国期には地侍である一面、海運を営み、姓を称して屋号をもたなかった。江戸初期の寛永年間、加賀藩の米一万石を大坂に運んだが、これが近畿における北国廻船のはじまりであったといわれる。兵庫第一の富商であることは、いうまでもない。

ともかくも北風家というのは、兵庫における町方の王というべき存在であった。

北風という奇妙な苗字のいわれについても、この土地の故老たちはよく知っている。

この兵庫の地生えの勢力が、南北朝のころ、南朝に属していたというあたり、おもしろい。当時、公家方の南朝というものが、思想として律令公家体制の復活というおよそ歴史の実情に適わないものであったにもかかわらず、その配下の多くが、当時、沸くような勢いで登場した新興の商業勢力や交通業の徒（陸上は馬借、車借。海上は廻漕業）であった。過去の権威の亡霊のような公家勢力と、社会にまだ正規の席をあたえられていない商業勢力とが合体するという現象は、他の国の革命期にもしばしば見られる。

兵庫の北風という一党も、そういう新興勢力の一派として南朝に味方したのであろう。

北朝年号建武三年（一三三六）二月、北朝方――武家方――の総帥足利尊氏が九州で勢力をあらたに興すべく兵庫まで退却し、ここで軍船三百艘をととのえ、諸将とともに乗船した。

そこを北風一党が、船で襲撃した。北風のはげしく吹く夜で、足利方の船団を大いにかきみだしたといわれる。

このときまで、この一族の姓は白藤といった。南朝方の新田義貞はこれをよろこび、姓を喜多風（のち北風とあらためる）に替えさせ、当主惟村に自分の名の一字をあたえ、貞村と名乗らせた。

この家系伝承から、北風家には「貞」の字のつく名が多く、嘉兵衛のこの時期の北風家の当主

は、貞幹である。

江戸体制では、町人には屋号を名乗らせた。

苗字持ちの大町人でもその商業勢力をあらわす呼称はかならず「なになに屋」であった。姓を屋号代りにつかっているのは、この兵庫の北風だけだったのではあるまいか。

この商業勢力の主たる事業は廻船であり、次いで他船の荷を買って兵庫で市を立てることであったが、その思想はあくまでも大坂の商権に対抗して兵庫の商権を確立することにあった。このために船乗りという船乗りに、店をあげて奉仕した。

ふつう吝嗇ときまった商家としてはめずらしいやり方といっていい。このことは、船による国内貿易というものがいかに儲かるものであったかということを想像させる。

舟人たちのほうも、北風家ほどの商家に奉仕されてそれがあたりまえというふうに思いあがりはしなかった。当時、身分制社会では、むしろかれらは感謝し、感激性のつよい連中などは、北風家のためならどういうことでもするという気分をもった。

嘉兵衛なども、古い船乗りからきいているのは、

「しけにあえば、まず金毘羅様をおがみ、次いで兵庫の北風様を念ずるのじゃ」

ということで、後半は半ば冗談であるにせよ、北風家がいかに船乗りたちからありがたがられているかを察することができる。

「おふさ、北風の湯へゆく」

といって家を出た最初のときはさすがに嘉兵衛も緊張した。

嘉兵衛の住む西出町は、たえず潮風のにおいがした。

（西風だな）

とおもいつつ、吹かれてゆく。陸にいても体のほうがたえず風のむきを感じてしまうのである。

兵庫のこのあたりは、大小の家が軒をならべてすきまもない。巨大な店舗をもつのが廻船問屋であり、長屋門をもつのが、諸大名から「本陣」を委嘱されている大地主の家である。

船具屋というのもおもしろい。店の奥に帆布を積みあげ、帆綱をとぐろのように巻きあげて土間に置き、店頭には看板がわりに大きな碇を置いていたりしている。繁昌している船具屋ではその大碇が十日に一つは売れるという。

碇については、北風家にちなむ話がある。

北国あたりに籍をもつ船が兵庫で碇を損じ、修理する金もなく、出帆できずに困じはてていた。その船の沖船頭が方策つきて北風家の番頭にたのみこむと、あたらしい碇ととりかえてくれたという。

――腰低くして来る者に煩き顔をするな。

というのが、北風家の家訓の一つであるという。北風家が、船乗り一般に要求しているのは誠意と礼儀正しさであり、そういう相手であればどんな相談にも乗ってやれ、ということであった。

ついでながら北風家は北風六右衛門家が総本家とされていたが、いまは衰微し、本来別家であった北風荘右衛門家（現当主は荘右衛門貞幹）が総本家のような体になっている。

明治四十四年刊の『西摂大観』下巻に、兵庫ですでに亡んだ豪家のかずかずが触れられている。その北風の項に、

「頗る公共事業に盡せり」

とか、

「北風家の栄華豪奢は、決して個人的虚栄にあらずして、社会的慈善の意味を含む驕(おご)りなりき」とかいう文章がある。『西摂大観』の出たころの兵庫では、すでに北風家の記憶が薄れつつあったのだが、この文章には、かつて右のような家風をもった北風家のほろびを傷(いた)む感情がこめられている。

『北風遺事』

という書物がある。

著者は、安田荘右衛門（一八六九～一九五一）という人である。

この人は北風家の親戚の安田家から養子に入り、明治二十一年に家督を継ぎ、北風家没落とともに生家の姓に復し、銀行員になった。

そのかたわら北風家の最後の人として家史の史料整理につとめ、昭和九年『北風遺事』という謙虚な表題のもとに家史をまとめた。

それを昭和三十七年、北風家の門流につながる喜多善平氏、安田正造氏が非売品として公刊されたもので、神戸史と江戸期の廻船業を知る上で重要な著作といっていい。

北風荘右衛門は商賈(しょうこ)なれども奥向は武家風儀の家にて……

と、その家風を知る安田荘右衛門は書いているが、この家が幕藩の慣習に異をたてて屋号を持たず姓を称したのも、そういう気概と無縁でないにちがいない。

嘉兵衛が北風家の勝手口から入ると、そこが土間になっていて、幾人もの下女がめしをたいた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com